短編小説「モノレールストーリー」

月に願いを

吉成 庸子

夕焼け空の美しい日だった。明美はこの千葉市の少し外れにある書店の閉店時間に合わせて本の整理を始めていた。

この書店は古くからあるのでお客様も長い間通ってきてくださる方が多い。近頃本当に本屋さんが失くなってきている。だから従業員も少なく本店員は明美一人だけになってしまった。けっこう重労働もあるのでパートの中年男性が来てくれてはいるが…。

明美は山形から出て来てここで働き始めて5年余りの月日がたっている。店主が父親の知り合いなので、何も聞かずやとってくれたのだった。

住居は店の近くの1LDKのマンションだ。明美は現在三十五才だ。明美は、過去は全部捨てて生きている。山形で短大卒業後、地元の優良企業に入社、明るい日々を送っていた。突然社長の長男との縁談が持ち込まれた。周囲には何の反対もなく、あっという間に明美は嫁いだ。

高校時代好ましいと思っていたいわば初恋の人はいたが、その人は東京の大学へ行ってしまってからは、ほとんどつきあいもなかった。田舎町では明美はいわばシンデレラだった。

夫は優しく一年後には男の子も生まれた。経済的にも豊かだったので暇をもて余し、おしゃれや仲間の奥さん達とランチをゆっくりとったり、エステにいったりして時間をつぶした。なにしろ初孫が可愛くて仕方ない夫の両親はこの子はこの家の後継ぎだから「私達が責任もって育てますよ」と言ってベビーシッターまで雇い入れて、ほとんど自分の家に連れて行ってしまった。「これじゃ、よくないのじゃない？」ある夜夫に聞くと「あんなに喜んでいるんだ。今から帝王学とやらを仕込んでいるなから悪い事じゃない。それに明美だって自由が出来ていいだろ。何なら、仲良しと外国旅行でも行って来たら」なんて言う。

夫の優しさ、豊かさに包まれ、わくわくした月日を過ごしていた明美をすぐに衝撃が襲った。通いの街角で、一人の女の人が訪ねて来た。三十七～八才に思えるその人はいきなり明美の夫の愛人だと名乗った。

「ご主人に聞いてごらんなさいよ。彼が入社した直後からの仲なんだもの。娘もいるの。もうこれ以上待てないからね」そう言い残した彼女が帰ってから、混乱する頭をなだめなだめ、夫に聞いた。本当だったのだ。

その日から明美は死のうとしたのだ。全部を捨てて千葉へ来て書店で働いていたのだった。

博志との再会は神様のお恵みだったかもしれない。成績が良く清潔な感じのする博志にひかれ、二人は仲良しで休日隣街へ映画を観に行ったりしていた。ただし博志が東京の大学へ入学してからなんとなくしてはいけないと思ってしまったのだ。その博志が書店に現れた時、わからなかった。ただ